

どこにでもある街角の蕎麦屋のガラスケースの中、色あせた蠟細工のサンプルの脇に、陶製の七福神や、お定まりの木彫りの熊、時期外れの干支、粗品に貰ったビニール人形知り合いが置いていったであろう何処だかの民芸品、などなどが無秩序に列んでいる。

もともとは脈略はないのだが、長く置いてあると、あたかもここは俺の居場所だといったげに聞こえてくるから不思議だ。それは床の間であったり、筆筒の上であったり云々……

私の作品は1988年の個展以来飽きもせず、展示場では群像の形をとる事が多いけれど、販売する場合は個々の物として買われていくので（といっても滅多に売れないが・・）結局はひとつひとつが、まったく別の状況で眺められる事になる。複数でお求めになるには、それなりに値引きをするつもりではいるが、今のところ、そんなお方は現れないから仕方ない。

群像ともなれば、ここにこれを置いて、その横をこれで押さえてといったようにバランスを見る。シテとしては弱い、ワキとして必要な形もある。但し数を並べる作品は、説話文学のように、それぞれが独立していないと面白くないと思っているので、結局は個別のモノドモなのだ。だから、冒頭の蕎麦屋のケースではないけれど、もしも偶然入った飲み屋のTVの上か脇に、自分の作品が達磨と並んで置いてあったりしたら、ワガコトナレリ・・と涙するであろう。

本朝では古来より、物には心が宿ると考えられていた。臨在感という単語もある。モノと暮らし、モノと語り、モノの言葉を聞いた、だからモノガタリという言葉があるわけだ。モノゴコロツク・・とは、何て素敵な言葉ではございませんか。ところが今日の芸術家諸兄は、誰が流行らせたのか、わざわざ出来ている物をぶった切り、ぶちこわし、中には勿体ない事に御神像まで切り刻んでいる人もいる。自分にはこんな罰当たりな事は到底出来ないし、そもそも根がしみったれだから、ここ数年は、誰かが捨てていった端材や、引き取り手のない材料を拾い集め・・いやいやオシイタダイテ、制作している。

制作や展示に関して、時折その目的めいた事を問われはするが、素直に答えるならば「御来場賜りました皆様の、御多幸をお祈りしております」で、これに尽きるし、これ以外は無。自分は演芸にも足を突っ込んでいるので、案外こういう事は自然に思えるようになっている。美術のアリカタだの、彫刻のナントカ等は、考えているとしても、むしろ些末な部分なのだ。特に2005年の個展からか、性根にあるのは「無病息災」や「家内安全」や「諸願成就」であり「池の汀の鶴亀」であり「四海波静かにて」である。最近はこれに「罪障消滅」が加わった。もっとも、御多幸をお祈りするのは、ある程度好意的に観てくれた人達で、ハナもひっかけないような高慢なヒョーロン家や、知らない間でもないのでちっとも観に来てくれない大サッカ等は、転んだ先に犬の糞でもありやがれ、と念じているのである。

仏師でもない者が、自分の解釈で、福神や宝塔など彫って良いものかと気にしてはいたが、幸田露伴の風流仏に、以下の文章を見つけて気持ちが楽になった。

或紳士の拝まれたるは、ビロウドの洋服すそ長く着玉いて、駄鳥の羽宝冠に鮮なりしに、某貴族の見られしは、白襟を召て錦の御帶金色かくえくたりし、とかや。それに引変え、破れおんぼう着て藁草履はき腰に利鎌さしたるを、農夫は拝み、あわちぢみの浴衣、綿八反の帯、洋銀のかんざし位の御姿を見しは、小商人にて（略）これ皆一切経にもなき一体の風流仏、拝みし者誰も彼も一代の守り本尊……………

つまり「惚れ込んでしまえば、それが仏の姿となり得ますよ」と書いているのである。但しその後の部分で、あんまりあっちこっち無分別に崇拜するもんじゃありません、と付け加えているが。

ましてや、拝んでみたもののちっとも御利益がない、なんて逆恨みしてはいけないのだ。
勝手に思い込んでいるのはこちらであって、偶像物に責任があるわけではないからである。
嬉しいのは仏の前に風流とつけてくれた事で、信仰に風流とは些かミスマッチな気がするが、「風流」！この実に曖昧にして、奥深く、有り難い御言葉を、自分の道具箱に加えただけでも、先端芸術・前衛主義者の弱点を見つけた思いがするわけだ。

さて、そんな自称「置き-モノ派」作家としては、作品モ家庭サイズニテ群像デアル事ノ多キ為、発表した個体数も530までは数えたが、今回の分を加えると582体となり、細かい物を加えると大体600体以上はすでに製造し、人目にさらした事になる（ここまでに四半世紀を費やした）。
そのようなわけで、大体1000体が自分の到着点だと、数年前から思うようになっている。
因みに円空の目指したのは十二万仏でこれには遠く及ばない。もちろん数合わせをする為に乱造しては意味がないので、これから10年くらいコツコツと続ければ、大体そんな数になって、その時こそ鑿の納め時だと決めている。それ以上の数は、もう造らない方が良いでしょうし、
それまでに造られた物の整理にも何年かは必要となるだろう。今のところ、自作の後始末が出来るのは、自分以外にはいないからである。

いづれ自分の作品も「詠み人知らず」のまま、古道具屋の店先に並べられていたらホンモウ。
自分は擬古典主義への憧憬があるからか、常々前向きに後ずさりしていないと落ち着かない。
美術家もある時期がくると、美術館に行くよりも、博物館の方が楽しくなってくるようである。
あれは大型の骨董屋なのだと、最近気がついた。

2011年 5月